



エッセイ：特集——記憶を育む／記憶と向き合う：子どものことばの実践を捉え直す

記憶を繰り返して育むことば

2歳までの言語活動を振り返って

小坂 茉莉子 *

© 2025. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

現在1歳11か月になる娘は生まれた時から「日本語と英語を話す母」である私と「英語が大半だが、日本語の単語が会話に混ざる父」の元で育っている。私自身は日本生まれ、大学進学にあたってESL課程で英語を学んだ日英バイリンガルだが、夫はほぼ日本語を話さない英語モノリンガルのため、出産前の我が家の家庭内言語はもっぱら英語であった。娘が生まれたことで家庭での言語環境を考えた際に

- ・ 娘には継承語として日本語を学び、日本にいる親族とコミュニケーションを取ってほしい
- ・ 家族3人での経験はその場で一緒に同じことばで共有したい
- ・ 地域に日本人コミュニティはほぼ無く、近隣の都市部（ニューヨーク市など）と違って言語の多様性に欠ける地域である

という点を考慮し、英語と日本語を混用することを家庭内言語方針 (Family Language Policy: FLP) として決めた。

バイリンガル育児を始めた当初は、家庭内言語方針という名称も考え方も知らず「私と娘2人の時は日本語を頑張る、でも夫も含めた会話は英語にしたい。」という私の考えと、「バイリンガルに育つことは娘の人生においてアドバンテージになるはず、この機会に自分も一緒に日本語を学

* アメリカ コネチカット州在住 (Eメール: mariko.kosaka@gmail.com)

びたい」という夫の思いを、出産前の何気ない会話でお互いに確認しただけであった。後にバイリンガル教育や複数言語環境でのことばの育み方を学びながら、我が家での言語管理や言語態度が明確になり、家庭内言語方針は英語と日本語を混用する Mixed Language スタイルに落ち着いていた。

なぜ当初から「日本語を頑張る」という考えに至ったかだが、海外に暮らす日本にルーツを持つ家庭での日本語継承を語る際、それがいかに親子の多大な努力を要するものかを繰り返し語られるので、漠然と家庭で2つの言語を使ったからといってバイリンガル話者に育つとは思っていなかったからである。

また、バイリンガル育児を意識した当初は、頑張らないと日本語が英語に淘汰されるのではないかという漠然とした不安もあった。これはマイノリティ言語としての日本語継承を語る際、現地語（当地の場合は英語）は日本語に敵対する物として語られるエピソードやアドバイスを頻繁に聞いたからである。

「補習校に入ったら先生に、親御さんは英語がわからないフリをしてでも日本語だけでと言われて大変、もっと小さいころから日本語だけの環境に出来れば良かった」

「幼児の今、日本語を頑張らないとダメよ、学校に入ったらどんどん英語が強くなるから」

「私（日本語話者の親）との会話も、油断すると英語になる」

「注意しないと兄弟同士の会話がどんどん英語になる」

など、まるで日本語とそのほかの言語が対立する別の物として存在し、それらがせめぎ合いながら子どもの言語能力を取り合いしているように語られるのだ。それを反映してか、OPOL (One Person One Language) や MLAH (Minority Language at Home) といった家庭内言語方針こそが日本語継承の成功方法であるとして語られることが多い。日本語と英語を混用する家庭と接すると「うちは日本語を諦めてしまったから」と否定的に語られることもある。

こういった状況で、家族構成と理想とする家族間のコミュニケーションの形から、あえて日本語と英語の混用を選択した者として、なんとかして日本語を頑張らなければいけないという意識と共に、私の日本語継承を目的としたバイリンガル育児はスタートした。

しかし、海外に住む一人の母親から見て、幼児期それも3歳以下の幼児を対象とした日本語継承のための教材は無いに等しく、見聞きするアドバイスも「とにかく日本語に多く触れさせるべき」として読み聞かせや話しかけを推奨するに留まる。中島（2016）はバイリンガルの発達において0～4歳までが非常に大切な役割をしており言語形成期として捉えるべきだと指摘しているが、幼

児期の在外教育機関不足も課題として挙げている。当地での日本語育児イベントなどは季節の日本行事にあわせた歌や製作・子ども同士の交流などアイデンティティ形成の側面がほとんどで、どうやって発語を促すか・どうやって語彙を広げるかなど、ことばの獲得に絞った内容は非常に稀である。それならば日本の幼児教育教材などを使ってことばを伸ばせば良いかとも考えたが、日本で暮らす幼児向けの教材は日本社会を反映するため、娘の当地での経験と結びつかないことも多い。当地では郵便ポストは赤ではなく青色だし、横断歩道の信号は3色ではなく Walk と Stop のサインなのである。

結局、自分なりにバイリンガル教育に関して調べ、実践方法を探った結果が、意識的に子どもとことばで触れ合う「言語活動」である。その内容は娘の実体験を繰り返しなぞったり、絵本と実体験を繋げたりということを意識して行っている。この言語活動の実践報告と共に、現地語が日本語を淘汰するという考えを改め「日本語を頑張る」から日本語と英語両方を含めた「娘のことばを伸ばす」に意識を変えた出来事を紹介したい。

2. 意識的なルールをもった Mixed Language

まず我が家の言語環境について整理したい。家庭内言語方針に Mixed Language を採用していると言うと、親の気の向くまま日本語と英語を織り交ぜながら会話しているように聞こえるかもしれないが、「レッセフェール方式¹は何らかのコントロールを行わない限り、社会の言語が家庭内でも優勢になる」（福田ほか, 2022）ということからも、娘の日本語インプットの質と量を確保するために、意識的に以下のルールを定めている。

- ・私と娘の 1 対 1 の会話は日本語のみ
- ・家庭での夫を含めた会話は英語で行い、英語の文章に日本語が混じる code mixing を許容する
- ・家庭外で私は娘に対してその場に相応しい言語（例:地域の図書館や公園では英語、日本人コミュニティのイベントでは日本語）で話しかけ、code mixing はしない

このルールに行き着くに当たって、Raising a bilingual child: Finding strategies that work best (Toscano, 2023) という講演を参考にした。

1 自由放任主義。

この家庭内言語方針で展開されるある日の我が家の食卓での会話はこうである。

私（娘に対して）：○○ちゃん、きちんと座って。ほら、にんじんも食べて。

夫（娘に対して）：Oh, にんじん . You should try it, it is tasty!

私（夫と娘に対して）：We read a book about にんじん today. We read it many times, remember?

娘（指さしながら）：にんじん！

このやりとりが、例えば地域の公園で他の子どもと一緒に座りながらのスナックタイムなら、私の声かけは“Hey, do you want to eat carrots? Would you please sit down to eat?”といった具合に英語のみとなる。家での食卓と同じで、隣にいるのが夫か他人に関係なく私と娘の1対1のやりとりであるのだから、日本語でも良いのだが、我が家が住んでいるのは言語多様性のある地域ではなく、今後も娘がこの地で育って行くと考えたとき、地域では英語を使うという切り替えを見せておきたいという考えからこうしている。

また日本語インプットの質を担保するため、私と娘との1対1の会話においては「carrot 好き? もっと eat する?」といったように1つの文に日本語と英語を混ぜることはしないよう常に心掛けている。周囲に日本語話者のいない地域に住んでおり、日本語デイケアや日本人シッターへ預けるといった機会もない我が子にとって、私は身近で唯一の日本語話者であり、できるだけ手本となる日本語は code mixing を含まない文章が良いだろうという考えからこうしている。ただ、私にとって生活で使う言語は15年以上英語だったこともあり、英語で話す癖がなかなか抜けないため、咄嗟に英語が出てしまう場合もあるが、その場合は英語で言い切った後に日本語でもう一度繰り返すこととしている。“Want to go — お散歩行く?”と文の途中で日本語に切り替えるのではなく、“Want to go for a walk?”（一呼吸おいて）「お散歩行く?」といった具合である。

2. 1. 家庭内の会話における翻訳

1歳6か月を過ぎたころいわゆる語彙の爆発期を迎えた娘は、とにかく頻繁に覚えた単語を使って意思表示をするようになった。例えば「(袋を) あけて」を獲得すれば、相手が誰であろうと「あけて、あけて」と発語する。この場合、私は夫に対して“あけて means ‘please open it’”と翻訳を交えて会話の橋渡しをするようになった。娘に対して「あけては open だよ」など翻訳を教えることはしないが、私が夫に対して翻訳する様子は見ているという状況である。

夫は娘と接することで覚えた新たな日本語語彙を会話に折り混ぜて話す。今のところ、夫が子

どもに対して意識して code mixing を含まない英語だけで話す場・時間等は設けていない。こう書くと日本語インプットの質にこだわる割に英語インプットの質に無頓着なように見えるが、日本語と英語を織り交ぜた親子3人の会話は多文化家庭の私たちが今後も続けていきたいコミュニケーションの形なので、今は母と話す日本語と家庭で話す「私たちのことば」に重きを置いている。学校に通い出せば地域で話す英語という部分は補われると期待している。

3. 家庭での言語活動

我が家で行っている、子どもとことばで触れ合うことを目的とした言語活動を紹介したい。

3. 1. 一日を振り返る「話しかけ」

日本語でのインプット量を増やすべく取り入れているのが一日を振り返る話しかけだ。両親共に在宅ワークで自宅保育をしていることもあり、一日の大部分が日本語、英語の混ざる会話だが、1日に1回入浴時または就寝前に「今日やったこと」を振り返る日本語での話しかけの時間をとっている。「今日は図書館へ行ったね」など一言で済ませるのではなく、「今日はさ、7時になるまでよく寝ていたよね。朝ごはんにもムレツ作る時、〇〇ちゃんも手伝ってくれて卵混ぜてくれたね。図書館に行く前に今日は新しい靴はいて、歩いて図書館まで行ったね。帰り道に△△さん家の前でワンワンに会って触らせてもらったね」といった具合で頭の中で一日のビデオをもう一度再生するように、なるべく細かい描写で話すよう心掛けている。

子どもにとって家の外での経験は、大概英語で経験したことだが、この振り返りの時間は日本語で記憶をたどりながら振り返る。私自身も英語で体験した記憶は、「Library で painting event 行ったね」など日英混ざった表現が頭に浮かぶことが多いが、「図書館で絵の具を使ってお絵描きするイベントに行ったね」など、とにかく日本語で表現するように気を使っている。

3. 2. 絵本の読み聞かせ

生後2か月ごろから娘の生活空間にはおもちゃと一緒に絵本が置かれている。主に日本語の絵本を揃え、読み聞かせの頻度や冊数は特に決めていなかったが、0歳児の間は1日1回程度本棚の前に座って娘の興味が続く間だけ絵本を開くことを意識していた。1歳を過ぎて、自分から本を選んで読み聞かせを要求するようになってからは、基本的に時間が許す限り、娘が読みたい

と持ってきた時には娘の気が済むまで読み聞かせをするようにしている。1歳11か月の現在、我が家の蔵書は圧倒的に日本語絵本が多いが、毎週地域の図書館で10冊程度の英語絵本も借りており、日本語2冊、英語5冊を読む日もあれば、日本語30冊、英語10冊を読む日もある。日本語絵本を読めるのは私だけなので、娘が読み聞かせを頼みにくるのは大概私だが、私が不在の場合（我が家では朝は夫と娘の二人時間になることが多い）夫とは英語の絵本を読んで過ごすことが多いそうだ。後述するアルバムの言語活動で絵本を良く活用することもあり、0～3歳向けの幼児絵本だけでなく年中・年長向けの自然科学本や図鑑も本棚に並べるようにしている。

3. 3. 読むためのアルバム作り

元々、娘は自分の写真に興味のある子で、外出先でぐずると携帯電話で娘の写真を見せれば大人しくなる子だった。写真を見ながら「どこどこへ行ったときの写真だね」と振り返ることが多かったが、1歳半を過ぎてからは携帯電話で写真を見ることを明確に要求するようになり、「でんしゃ!」や「△△ちゃん!」など過去の出来事を指定してその写真を見せてと要求するようになった。そこで、娘がいつもリクエストする写真をプリントしたアルバムを作成し、いつでも娘の手の届くところに置いたところ、絵本と同じように「よんで!」と持ってくるようになった。始めは「うーん、これはアルバムだから絵本じゃないんだけどなあ」と困りつつもページと一緒にめくっていたのだが、これを家庭での言語活動として取り入れることにした。

娘がアルバムを読んでと持ってきたら、ページをめくりながら「これは旅行に行った時の写真ね、いきなり雨が降ったの覚えている?」「いちご狩りに行った時の写真だ、こんなにいっぱいのおいちご食べてびっくりしたよ」「これはジジとババと花火を見に行った日の写真だね」と写真の中にある過去の出来事を詳しく語る。発語が多くなってからは「これは何?」「○はどこでしょう」といった具合に娘に問いかけることも多い。娘は私とアルバムを読む時は日本語で、夫とアルバムを読む時は英語で、写真を通して何度も記憶の中にある経験を繰り返しているわけである。この頃 Jim Cummins 氏の講演（カミンズ, 2022）から教育的トランスランゲージングというアプローチを知り、2つの言語を分けて捉えるのではなく、交差しながら互いに関係しあう言語を併用して学習を促すというアプローチに共感したこともあり、このアルバムを読む言語活動は家族で熱心に取り組んでいる。

アルバムを開く頻度や時間は決めていないが、小型の写真プリンタを購入し、数日に一回は携帯電話のカメラロールを娘と一緒に見返しながら、アルバムに入れる写真を印刷することで、アル

バムを見返すタイミングを作るようにしている。

3. 3. 1. 語彙の獲得

この「アルバム読み」は、語彙の獲得・定着に一役買っていると感じている。今までに印象深かったのは娘が「うんどうかい」という語彙を獲得した時だ。1歳5か月で参加した日本語補習校団体主催の運動会を、娘は長らく「つっちー」と呼んでいた。つっちー先生と一緒に手足を使ったペインティングをして運動会用のTシャツを作ったからである。このつっちー先生とは日本語絵本の読み聞かせイベントで定期的に会っており、娘にとっては馴染みのある大人の一人である。運動会は余程楽しかったのか、運動会の写真を見せてと要求する時は「つっちー」と言い、作ったTシャツを引っ張り出してきては「つっちー」と指さししていた。この運動会の写真も数枚プリントしてアルバムに入れ、アルバム読みに加わった。

娘：つっちー!

私：そうだね、これは運動会で撮った写真。

娘：つっちー!

私：うんうん、つっちーと運動会で着るためにTシャツ作ったね

といったやりとりを数日繰り返したところ、運動会の旗の前で撮った写真は「うんどうかい」、つっちー先生と一緒に写った写真は「つっちー」と使い分けるようになり、運動会当日の他の写真を見せても「うんどうかい」と正しく識別するようになった。運動会は日常的に行われるイベントでもなければ、我が家にある絵本にも出てこないの、娘の「うんどうかい」ということばは写真を見ながら記憶の繰り返しのなかで獲得された語彙である。

3. 3. 2. 日本語と英語の紐付け

アルバム読みは日本語と英語を紐づけることにも一役買っている。娘はトラのことを先に英語でTigerと覚えた。動物園に初めて行った際、指さしながら話しかけたのが“Tiger”だったからである。それからは日本語・英語どちらの図鑑を開いても“Tiger”と言い、トラのぬいぐるみを見ても“Tiger”と指さしながら発語していた。このぬいぐるみが娘のお気に入り、呼び名がそのまま「タイガー」になったこともあり、私も「ほらタイガー居るよ」「タイガー持ってきたら」と話しかけるなど、一時期Tiger/タイガーは我が家の頻出単語だった。ただ、私とのアルバム読みは日本語での言語活動の時間なので

娘：Tiger!

私：そうだね、トラだ!動物園のトラ、目の前まで来てくれたよね

といったやりとりをしていた。娘は「トラ」と言い直すことは無く、いつも通り楽しそうに“Tiger!”と指さしを続けていたが、ある日 あいうえお図鑑の「と」のページにトラのイラストが書いてあるのを見つけて、いつも通り“Tiger”と言いながら指さしたので、「そう、Tiger ね。Tiger ってさ、他にはなんて言うんだっけ?」と日本語で質問したところ即座に「トラ」と返事があり驚いた。

3. 3. 3. 「同じ合わせ」で記憶と身の回りの物を繋げる

当初、このアルバムは娘自身が映る写真や家族写真といった娘の成長アルバムだった。しかし、娘が「同じ」という概念を理解してからは、出かけ先で見つけた物や風景の写真なども入れるようにしている。というのも、動物園へ行って見たヤギの写真を振り返れば、本棚から「おなじ!」と言ってヤギの絵本をひっぱり出し、亀の写真を見れば亀の人形を持ってきて見比べるなど、写真と自分の身の回りの物を紐づけるようになったからである。

娘が「同じ合わせ」を始めてからは、身の回りの物と合わせる写真を撮るために、散歩や旅行先を選ぶことも増えた。海の絵本がお気に入りだった時は海へ連れて行き、現地では絵本の一節を語りかけ、家に戻ればビーチで撮った写真と絵本を並べて「海行ったよね!動いている波面白かったね」と話した。絵本で見た描写と同じ具合にてんとう虫が花に止まっていた時は思わずカメラを構えて写真に残した。最近ではこの読むためのアルバムを作るといことも言語活動の一環になりつつある。

4. 家庭の外へ広がる言語活動

こうして家庭での言語活動を通してことばを学んできた娘は1歳11か月現在、月齢相応に日本語・英語両方での指示を理解する。しかし発語として現れる語彙は圧倒的に日本語が多い。日本語絵本の読書量が多いこともあるし、生活に必要なやりとりを私が日本語で教えているということも要因だと考えられる。指さしでの要求が始まってからは「ください」や「あけて」と言った要求をことばで伝えるよう繰り返し教えたし、「どうぞ」と物を渡した時には「ありがとう」と娘が言うまで渡したものを手放さないなどして日々のことばのやりとりを日本語で練習している。なんでも日本語で教えようというわけではないのだが、娘は日中私と過ごす時間が多く、私が生活習慣を教えたり躰を行ったりする機会が多いためだ。

4. 1. 「ありがとう」と“Thank you”の使い分け

ある日、地域の図書館のイベントで、娘がポップコーンを頂いた際にお礼のことばを促すため“*What do you say?*”と英語で話しかけた。私は娘が何か返事をするとは考えておらず、私自身が“*Thank you*”と言って見せようと思っただけの話しかけだったが、娘は少し考える表情をした後に「ありがとう」と返事をしたので驚いた。家とは違う環境で英語で問いかけられた場面でも、娘は「物をもらったらお礼を言う」というやりとりを理解していて、「ありがとう」ということばが出たのである。このやりとりは、これまでの私のバイリンガル育児の考え方を改めるきっかけとなった。

娘はこの図書館に週2日ほど通って、読み聞かせ会や音楽クラスに参加している。半年通った頃からスタッフに名前も覚えてもらい、定期的に会う友達も出来た。喃語を話す月齢では意識しなかったが、ことばが育つにつれ、友達の手を握って「あっちー!」と言いながら誘導しても友達に困惑されている様子や、キッチンセットで遊びながら「りんご!」とおもちゃを渡しても子ども同士で意思疎通の出来ていない様子を見ていると、今まで「日本語を頑張ろう」ばかりだった考えが「英語と日本語の使い分けをどう教えよう」に変わった。「現地校に行き出したら英語が強くなるからなんとかかなるだろう」と2～3年先に期待して悠長に構えてはいられない、週2日の図書館は今現在、娘が生活する社会の一部であり蔑ろには出来ないのである。

まず手始めに「ありがとう」のやりとりを、意識して英語でも教えることにした。夫と私の間で、大袈裟に“*Here you are*”“*Thank you*”のやりとりをして見せ、“*When somebody gives you something, you say ‘Thank you’*”といった具合に、英語で状況説明と期待される応答を教える。これは家の中で英語を話すシチュエーション、つまり夫を含めた3人の会話で練習した。毎週図書館で貸し出し本を受け取る際は私が英語で“*Say, Thank you*”と促したが、娘はしばらく「ありがとう」と返答していた。娘が英語で促された時に“*Thank you*”と応答するまでには1か月ほどかかった。

この *Thank you* の練習の本質は英語語彙の獲得ではなく、ことばを使い分けるための状況判断の練習だと考えている。*Thank you*と応答できるようになってからは私と1対1の会話で「どうぞ」と日本語で合図を出しても“*Thank you*”と応えることもあり、ありがとうと *Thank you* の使い分けができるようになるまで、さらに数週間かかった。その後、「あっちいこう」や「かして」など娘がこの図書館で必要なやりとりを、英語・日本語で使い分けられるよう練習を続けている。

状況を判断してことばを使い分けるという行動は絵本やアルバム読みではなかなか教えられず、ロールプレイや実際の経験を積むことで慣れさせる他にないと感じている。今までは家庭内

で完結していた言語活動だが、週2日通うこの地域の図書館も重要な言語活動の場となった。毎週顔を合わせるスタッフや保護者には我が家が日本語と英語混合で育児をしていることを伝えられている。

この夏、図書館での読書チャレンジを完走し、景品としてくまのぬいぐるみもらった娘は、嬉しそうに「くま！ くま！」と歩き回りながら周りに紹介していた。娘は Bear という単語をこの図書館で借りた英語絵本で先に覚えていたのだが、なぜかこの日の発語は日本語のくまだった。顔見知りのスタッフに「日本語で Bear って言っているの」と翻訳して伝えたところ「今日は〇〇（娘）に新しいことばを教えてもらったよ。“くま”って言うのだって！」と応えてくれた。小さなことだが、こうやって日本語・英語を混ぜてことばを使う娘のありのままを受けとめてくれた反応を、大変ありがたくなっている。

5. おわりに

当初、いつか日本語が英語に淘汰されるのでは、という不安を抱えて始まった我が家の日本語・英語混用のバイリンガル育児も、もうすぐ2年になる。この2年で、我が家ではバイリンガル育児を「娘のことば」という自転車の訓練に喩えて捉えるようになった。

我が家は親の方針で日本語の車輪と英語の車輪を装備した自転車に娘を乗せることにした。この両輪を繋ぐフレームは両言語に共通することばの力である。今はまだ小さいこのことばの自転車は、娘のことばの発達と共に成長し、時には車輪のバランスが悪くて運転しにくかったり、社会で小回りが効かなかったりするかもしれない。願わくは、娘にはこの自転車を漕ぎ続けながら、堅牢なフレームを持ち、娘が乗りやすいバランスの日本語・英語両輪を備えたフルサイズの自転車になるまで育ててほしいと思っている。その手助けをするために、家庭での言語活動を日々探求している。

文献

カミズ, J. (2022). 『バイリンガル教育理論とトランスランゲージング教育学——言語政策と教育実践への示唆』[基調講演] 国際交流基金海外継承日本語教育オンライン・フォーラム「多言語環境で育つ子どもの教育を考える」, https://www.youtube.com/watch?v=dhG6Pw_Tk0s

- 福田牧子, 段上知里, 本林響子, 横井幸子 (2022). ファミリー・ランゲージ・ポリシー ― 現状との展望『社会言語科学会第46回大会発表論文集』(pp. 273-279). <https://conference.wdc-jp.com/jass/46/contents/common/doc/all.pdf>
- 中島和子 (2016). 『バイリンガル教育の方法 ― 12歳までに親と教師ができること』(完全改訂版) アルク.
- Toscano, J. (2023). *MGfC Family-centered care series: Raising a bilingual child – Finding strategies that work best* [Video]. Massachusetts General Hospital. <https://www.massgeneral.org/blum-center/events/may-2023-raising-a-bilingual-child>